

- ☐ 問一 読書好きで物静かな性格だったが、「人気者」と親しくなり、自信を持ったことで友達も増え、大人数で盛り上がるノリも気後れせずに楽しめるようになった。
- 問二 固く結ばれた深い関係という意味ではなく、表面的に親しいだけという意味。
- 問三 自分が優位に立つために、目立つ者をすべて否定するカナを快く思わないが、その自信たっぷりの物言いには思わず同意させられてしまう強さがあると思う。
- 問四 張り切ってカナに目をつけられるのは馬鹿げていると思ってむなしくなったから。
- 問五 小磯をけなせば自分の告白は冗談となり、振られた事実はなくなるし、馬鹿な小磯に好かれたまやまのプライドを傷つけて、小磯の心をうばった腹いせもできるから。
- ☐ 問一 ① 唱歌 ② 由来 ③ 高官 ④ 美談
⑤ 功 ⑥ 成語 ⑦ 側近
- 問二 昔話をうのみにするのではなく、本当に正しいかどうか、現実的、科学的な観点から分析し、客観的に真偽を明らかにしようとする態度。
- 問三 明るい昼間に書を読めばいいものを、孫康と車胤が成人した後も相変わらず「蛍の光」や「雪明かり」を求め続けている点。

☐ 出典は、朝比奈あすか「君たちは今が^{すべて}世界」〈KADOKAWA〉。

問一 「小学三年生の新しいクラスで、同じ班になった『ひなっち』という子と仲良く」なるより前、「学校の低学年くらい」までのめぐ美は、一人で静かに「ずうっと本読んでた」ような子どもでした。「膝の上でそっと」本を開き、そこに広がる「知らない世界」で遊ぶことが好きだっためぐ美でしたが、姉から「ネクラ」「キモい」と言われて、嫌がらせを受けたことや、そもそも「めぐ美自身」に、おとなしい「性格を変えたかった」という思いがあり、次第に「本を読んでばかりいてはいけないのではないだろうか」という疑問を抱くようになっていきます。そんなとき、「運動神経抜群」で「クラスの人気者だった」ひなっちに声をかけられためぐ美は、喜んで彼女の後を追うようになりました。「彼女と同じく『人気者』」のポジションを手に入れると、「大人数でわあっと盛り上がるノリ」にも「気後れ」しなくなり、友達も「自然と増え」、めぐ美はだんだんと「学校が楽しく」なっていきます。本を捨て、ひなっちと一緒にいることを選んだめぐ美の心には、これまで持てなかった「自信」が芽生えています。

〈解答例〉

⑤ 〈読書好きで物静かな性格だったが〉、⑤ 〈「人気者」と親しくなり、自信を持ったことで友達も増え、大人数で盛り上がるノリも気後れせずに楽しめるようになった〉。

問二～四 「小学校四年生」になっためぐ美は、「愛憎を帯びた幼稚なパワーゲーム」の末に、ひなっちからカナへとパートナーを変え、「ほぼカナとふたり組で過ごすように」なって、現在（小学校六年生）に至ります。ただ、めぐ美とカナの関係はカギカッコ付きの「親友」です。「自尊心」の強いカナは「誰かが（自分より）目立つ」ことが許せません。対象は「髪型を変えた同級生」から「上級生」「アイドル」「モデル」まで幅広く、「でも」に続いて、とにかく誰彼かまわずこき下ろします。そうやって誰かを「否定」して自分の優位性を保とうとするカナの態度を、めぐ美は静観するだけです。自尊心が強すぎる人は鼻持ちならないと揶揄（悪く言われる）され、敬遠されてしまいますから、親友なら注意するべきでしょう。けれども、めぐ美は「見て見ぬふり」です。気に入らない人を片っ端から否定していく態度に眉をひそめても、何も言わないのは、余計なことを言えばカナの機嫌を損ねてしまう恐れがあるからです。ただ、相手が誰であろうと臆せず、攻撃を仕掛ける「でも」には、見ている者も思わず同意してしまうほどのパワーを発揮するという見方もあります。「何も、そんなにムキになって、悪く言わなくても」と思っても、聞いているうちに「そうだよね」と同意させられてしまう〔→問三〕ほどの強

い「説得力」を持っていることを、いちばんよく知っているのは「親友」のめぐ美です。もし、カナに楯突いたら、自分も「でも」の対象となってしまう。本音を言えない相手は「真の親友」ではなく、「形（上辺）だけの親友」です〔→問二〕。二人の関係は「担当楽器を決める」ところにも表れています。めぐ美は『『打楽器』（マラカス）に惹かれ』ますが、そのことをカナに言うことができません。自分から先に「マラカスをやりたい！」と張り切って言ってしまうと、めぐ美は“出すぎた杭”となって、カナの攻撃対象となります。カナは「めぐ〜、何にする？」と聞いてきますが、めぐ美に決定権はありません。カナが「マラカスをやりたい」と言わないかぎり、マラカスの担当にはなれないめぐ美は、むなしい気持ちのまま、特に興味はないという態度でやり過ごすしかありませんでした〔→問四〕。

— 〈解答例〉 —

④ 〈固く結ばれた深い関係という意味ではなく〉、⑤ 〈表面的に親しいだけという意味〉。

— 〈解答例〉 —

⑤ 〈自分が優位に立つために、目立つ者をすべて否定するカナを快く思わないが〉、⑤ 〈その自信たっぷりの物言いには思わず同意させられてしまう強さがあると思う〉。

— 〈解答例〉 —

⑤ 〈張り切ってカナに目をつけられるのは〉 ⑤ 〈馬鹿げていると思ってむなしくなった〉 から。

問五 「アコーディオン」の担当になった小磯、カナ、まやまやが繰り広げる泥沼の（？）戦い（実際はクラスの女王様（カナ）が一人で騒いでいただけですが）を見ていきましょう。「まやまやを除いた三人で、遊びに行った」帰りに「カナが小磯を好きだと打ち明けた」のが事の発端です。女王カナ様の恋心が明かされただけでも大変なことです。何と「ほぼ同じタイミングで、小磯がまやまやに告白していた」（！）らしい。そのことを知った女王の取り巻き（めぐ美）たちの間には衝撃が走ったことでしょう。女王が思いを寄せる小磯が、あろうことか、まやまやに告白してしまい、しかも「スマホのトークアプリでのまやまやとの会話を保存して仲間たちに送信するという、信じられないバカ」ぶりを発揮するというオマケまでついていた。その結果、まやまやが「小磯の告白を、じらしながらも完全に拒否はしない意外なぶりっこぶり」という「女子どうして遊んでいる時の彼女と違う」「魔性の女」の顔を見せていたことまで広く知られることとなってしまいました。「まやまや、終わったなー」というめぐ美のつぶやきが、このあとの彼女の運命を物語っています。女王カナが恋をした小磯のハートをつかんだだけでも重罪なのに、思わせぶりの態度でもてあそぶ（！）という暴挙に（うっかり）出てしまったまやまやに、いったいどんな恐ろしい制裁が下されるのか。「親友」のめぐ美は「カナがまやまやに何か仕掛ける気だったら」「それにノろうと思って」いました。さあ、女王はどう出るか？「これはもう、吊るし上げるしかない。あるいは集団無視かな」……ところが、めぐ美の予想に反して、「カナは意外にもまやまやに優しくかった」。どうした、女王！ 地獄の苦しみを味わわせるはずじゃなかったのか！

女王の意外な態度に戸惑っていた周囲は、間もなくそれが、周到に計画された報復の始まりであったことに気づきます。「自分から『小磯に告られたってマジ？』と訊いたカナは、まやまやが恥ずかしそうに頷いたら、手を叩いて爆笑」します。これに続いて「小磯を『私服がダサイ』とか『よく見ると猿顔』などと言っただけにすくなくもなった」ことと合わせて考えましょう。自尊心の強いカナは気に入らない者をこき下ろすことで優位に立とうとしていたことを覚えていますか。「一部の女子から『かっこいい』と言われているほどには顔も整っているし、背も高い」小磯が、自分ではなく、まやまやを選んだのでは、女王の面目は丸つぶれです。しかも、自分が小磯を好きだということは、周囲に明かしてしまっている。「格好いい小磯を、かわいいまやまやに取られてしまったあわれな女王」にならないためにカナが選んだ方法は、得意の「でも……」でした。小磯を「（多少はもてるかもしれないが、でも、やっぱり）格好悪くて、馬鹿な奴」と、おとしめてしまえば、そんな奴を好きになるわけがないのだから、自分が「好きだ」と言ったのは冗談だったのだと言い訳することができます。しかも、そんな「ダサイ」奴に好かれてしまったかわいそうな（間抜けな）まやまや、という図式を作ることで、恋敵を奪った彼女への復讐も同時に果たすことができる。女王カナは自分に恥をかかせた小磯とまやまやを、得意の「でも」で鮮やかに切り捨ててみせました。

— <解答例> —

⑥ <小磯をけなせば自分の告白は冗談となり、振られた事実はなくなるし>、⑥ <馬鹿な小磯に好かれたまやまのプライドを傷つけて、小磯の心をうばった腹いせもできる> から。

二 出典は、瀬川千秋「中国 虫の奇聞録」。

問二 「困難にくじけず学問に励む大切さをしめす手本として、古来、中国の読書人たちが好んだ」「螢雪の功」という「故事」について、「清朝の名君・康熙帝」は「ホタルの光なんかで本が読めるものだろうかと疑いを抱いて」いました。康熙帝でなくても、どうもこれは「眉唾物」ではないかと考える人はたくさんいそうです。けれども、ふつうの人はそこまでで、康熙帝のように「側近に百匹あまりのホタルを捕ってこさせ、実際に絹の囊に入れて」試してみることまでは行わないでしょう。「西洋の幾何学や医学、天文学、音楽までを貪欲に吸収した康熙帝」は、故事が本当のことなのか、それとも作り話なのかどうかということについて、実験を行い、得られた客観的、科学的な根拠に基づいて、事の真偽をはっきりさせようとしています。

— <解答例> —

⑤ <昔話をうのみにするのではなく、本当に正しいかどうか、現実的、科学的な観点から分析し>、⑤ <客観的に真偽を明らかにしようとする態度>。

問三 「『螢の光』の故事があながち嘘でないことは証明された」ものの、「車胤のとった方法が賞賛に値するかはべつの話」であり、実際は「ホタルを光源にした読書」は「非現実的」です。そのことに「とくに気づいていた」人びとは「早朝から草むらに螢を捕りに」行ってしまった車胤と、昼間から空を仰いで「雪が降りそうに」ないことを嘆く孫康の姿を想像して笑い話を作ります。「螢雪の功」は若い頃、「苦学」していた車胤と孫康の姿から生まれた成語ですが、人びとは、成人して高官に出世したというのに、車胤と孫康が未だに「螢の光」と「窓の雪」を求め続けていること、しかも、その見当違いの行動は、いくらでも書が読める明るい日の光の下で行われていることを想像して笑っています。

— <解答例> —

⑤ <明るい昼間に書を読めばいいものを>、⑤ <孫康と車胤が成人した後も相変わらず「螢の光」や「雪明かり」を求め続けている点>。